

文学作品に登場する動物たち② ～ いふせますじ 井伏鱒二(1898-1993) 『山椒魚』



写真1

オオサンショウウオ

(オオサンショウウオ科)

学名：Andrias japonicus

英名：Japanese giant salamander

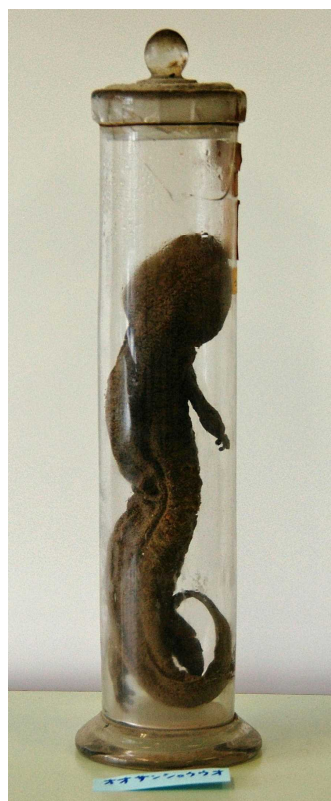
「山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。(「山椒魚」冒頭)」



井伏鱒二が著した「山椒魚」は「オオサンショウウオ」のことである。オオサンショウウオは、**日本固有種**で岐阜県以西から北九州にかけて分布しており、絶滅危惧Ⅱ類(環境省レッドリスト)に指定されている。体長が100cmに達するものもある世界最大級の両生類であるが、野生個体では40cm～70cmが一般的である。

冷たく澄んだ山間の急流に住んでおり、岩陰などに隠れている。そうした習性を踏まえて「山椒魚」は誕生した。佐野市内にはトウキョウサンショウウオが生息しているが、オオサンショウウオとは全くの別物の小型のサンショウウオである。



ところで、井伏鱒二の「山椒魚」には、目高(メダカ)や小蝦(小エビ)、蛙(カエル)などの小動物が登場する。生物学的にそれらの種について分析してみると、まず、オオサンショウウオが生息するような急流にはメダカは棲んでいない。おそらく、ヤマメやイワナなどの稚魚のことではないか。小蝦はスジエビなどの仲間であろう。そして岩屋に閉じこめられた蛙は？ カジカガエル、タゴガエル、ヤマアカガエルなどが頭に浮かぶが、決め手に欠けている。

佐高所蔵の標本は30cm程度の小型の個体であるが、いつの頃からか標本ビンの一部が破損していて、アルコールが全て蒸発してしまっていた(写真2)。いわば、オオサンショウウオの干物になっていたのである。しかし、オオサンショウウオの標本は滅多にない貴重なものであるため、栃木県立博物館から借用の依頼があり、**液浸標本**として復活した(写真1)。現在、那須塩原市にある「那須野が原博物館」の企画展「石の上にも3億年」で生きた化石の一例として展示されている。オオサンショウウオは、3000万年前から現代まで、姿形をほとんど変えずに生き抜いているのである。

(写真2：干物になっていた標本)

